
「つぶやき」 アプリケーション

花沢 小唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「つぶやき」アプリケーション

【Nコード】

N5138Z

【作者名】

花沢 小唄

【あらすじ】

「つぶやき」機能。それは自分の状況をつぶやいて他人と意見を共有するものだった。しかしその使用者であった大御は突然白い空間へと飛ばされてしまう。

「『つぶやいてみた』をご利用いただきありがとうございます」

そこにいたのは女の子（幼女）と10人の使用者達。

「皆さん今後死ないように頑張ってくださいね☆」

その言葉から始まる全100人の使用者との非日常。良くも悪くも『協力』の物語。

ブログ「つぶやき機能」

Dear…『昼食なう』

あひる…『今、読書中』

モノ子…『登校中に満開の桜を見た、（＊、＼、）ノハッピーな気分（＊、＼、＊）』

愛紗…『宿題がたんまりと溜まっている・・・今からやらないと・・・』

あひる…『Re…モノ子さん 桜、いいですね。僕もみたいです』

多田…『高校の頃の友達と偶然会った』

○

携帯電話の普及、パソコンの普及そしてネットが普及した今、色々便利なものが世の中に広まり始めた。

その中にはブログなどと自分のことを他人に知らせるようなものもあれば、アプリケーションという自分の生活を便利で、充実させるためのものまでたくさんある。

地図のアプリに日記のアプリ・・・そしてアプリではないが『つぶやいてみた』という短い文で他人と意見を共有したり自分の状況をつぶやいたりするものである。

「えーっと・・・」

カチカチカチという音が部屋に響く。

多田…『高校の頃の友達と偶然会った』

＜植木鉢…『今、学校が終わって部屋d』＞

カチカチカチ

多田…『高校の頃の友達と偶然会った』

＜植木鉢…『今、学校が終わって部屋で休憩』＞

「よし、これを『つぶやく』」

カチッ

多田…『高校の頃の友達と偶然会った』

植木鉢…『今、学校が終わって部屋で休憩』

「さて、と、そろそろ晩ご飯かな？」

ハンドルネーム『植木鉢』こと大御幸^{おおみこう}。この少年もまたその楽しさ、便利さに目をつけて『つぶやいてみた』を始めた1人だった。

「あ、フォローワーが増えてる」

フォロワーとは自分をフォローしてくれる、いわば友達のようなもの。フォローした人のつぶやきをすぐに見ることができるということなど気に入った人がいたらフォローすることが大事なのだ。

「最近つぶやくことが多くなったし、フォロワーも増えてくれるといいな」

携帯を机の上に置き、1階へと降りる準備する。

しかし大御は気づかなかった、携帯に1通のメールが届いていたことに。

○

「あれ？」

翌日。高校の授業の合間につぶやこうとしたところ1通のメールが受信されていた。

（昨日は早めに寝ちゃったし、1回つぶやいてから携帯触ってなかったなあ）

そう思いつつ携帯を開こうとすると

「大御くん」

と声がかかる。

誰だろうか？大御は思いつつ声のした方を見つめる。

「あ、臼井さん」

そこにいたのは臼井さんだった。

クラスの中心人物であり、委員長でもあるが、近寄りにくいという雰囲気はまるでなく、一緒にふざけてくれるので男子、女子からの人気は高い。

「えっと・・・実は星見くんのことなんだけど・・・」

「ああ・・・」

星見くんとは大御の昔からの友達であり、現在は絶賛不登校中の生徒である。

今まで明るく、そして人気ものだった星見が急に不登校になったことから何か特別なこと、特別に悪いことがあったんではないかと噂になってもある。

「今日もプリント、届けてもらっていいかな？」

「あ、うん」

いつものように星見の分のプリントを受け取る。

しかし大御は少しだけ確認したいことがあった。

「あのさ、僕が星見の家に行っても星見はでてきてくれないんだ。だから登校することに期待することはしないでほしいんだけど」

「ええ、わかってるわ」

ふふっと臼井は笑う。

「あなたに期待してないってわけじゃないの。だけどプリントは休んでる人にも必要なものでしょ？もし明日登校してきて宿題をやっ
てなかったら困るじゃない」

「ってことは僕にプリントを任せる理由は単純に『プリントを届ける』というだけってことだね」

「そういうこと。まあ、できることなら連れてきて欲しいけどね。みんなで進級したいし」

それは大御も同じ気持ちだった。

最近あっていないとはいえ、友達なのだ。

出席日数とかも心配だし、なにより今、彼がどんな問題を抱えているのか、それが気になっていたのだ。

できることなら一緒に考えてあげたいと思っていた。

「わかった」

「じゃあお願いね」

そういつて去っていく臼井を見ながら大御は携帯を開く。

星見に会ってはいない。

会ってはいないのだ。

でも、たまに、1週間に1回ぐらい星見は『つぶやいて』いるのだ。

それを大御はこっそり、身元を明かさずにフォローしている。

ただつぶやかれているのは当たり障りのないことだけれど、彼がまだいるということは大御にとってとても嬉しいことであった。

「あ・・・」

そしてまたしても忘れていた。

「メールがきてたんだった・・・」

誰からだろう、と思いつつそのメールを開いた途端に大御の意識はどこかへと飛んだ。

○

「ようやく来ましたね、＜植木鉢＞」

気付いた時、大御のまわりは教室ではなく真っ白なただの部屋だった。

ただし部屋と言うには広すぎる、空間といったほうがいいような場所だった。

「あれ？僕は確か教室に・・・」

「あれ？わたしの存在はスルーですか？」

ん？と大御はまわりを見渡す。しかし人物らしきものはどこにいない。

「ここですよー」

視界の端に小さい手がうつった。

「え？」

そこにいたのは小さな子供の女の子だった。

「どうもどうも、＜植木鉢＞。昨日メール送ったはずなのに全然気付いてくれないんだもん」

（・・・・・・僕は幼女のメアドなんて持っていないぞ・・・・）

大御は混乱しすぎて何からつつこめばいいのかわからなかった。

「まあ、混乱するのも無理はないですね。まあ、ただ安心してください。この世界は現実ではなく、夢や想像のたぐいのもので」「じゃあ、僕は夢を見ているということ？」

「まあ、そういうことですね。ただ夢から覚めたとき、これが本当に夢なのかを決めるのはあなた自信ですがね、＜植木鉢＞」
そこで気になっていることを1つ聞いてみる。

「あのお嬢さん、僕の名前はお・・・・・・」

女の子が大御の口を手で塞ぐ。

「それ以上は言わなくていいです。というか言うてはいけませんよ」
「もごもご・・・・・・」

「ここには＜植木鉢＞以外にもいますから。個人情報の漏洩はおやめください」

「ぷはっ・・・・」

なんとか手をどける。

「僕以外にもってどこにもいないじゃないか。それに＜植木鉢＞って一体なんなんだよ！」

とそこで気付く。

＜植木鉢＞。それは大御の『つぶやいてみた』のハンドルネームだったはずだ。

（なぜこの女の子が僕のハンドルネームを・・・・？）

いや、と大御は自分の意見を否定する。

（これが僕の夢ならそういうご都合主義のようなことが起こっても不思議ではないか・・・・）

「さて、そろそろ残りの人呼びますよ」

「だからその残りの人って・・・」

「皆さん、10人全員が揃ったのででてきてくださーい」

そう女の子が叫ぶと瞬間、そこに人間が現れた。

「!？」

ただどんな姿をしているのかは分からない。

そういう意味では形だけで人間と判断するしかないのだが。

1 「まったくようやく来たのかよ、＜植木鉢＞」

2 「まあまあ、そんな怒らないであげてください。＜植木鉢＞さんにもそれなりの理由が・・・」

3 「その幼女に聞いた限りではメールを開けるのを忘れていただけらしいがな」

4 「うーん、good! その余裕、男らしいぜ! cool!

5 「ふん! 私は昨日から待ってたのよ! だいたいあんたたちもメール開けたの今日じゃない!」

6 「みんな落ち着いてー」

7 「語尾をのばすと緊張感がまったく伝わらないぞ」

8 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

9 「ケンカしてると話が進まないってば」

大御は数えてみたところ9人。

そこに大御自信も入れて10人。

「個人情報漏洩をさけるため、実名、姿は見えないようになってますので」

「な・・・これは何・・・?」

「ではわたしから自己紹介を」

大御を無視して女の子は自分の自己紹介を始める。

「わたしの名前は『これ』と申します。よろしくお願いします」

さて、と女の子は仕切り直し。

「では皆さんの自己紹介をよろしくお願いします。状況の説明はそれからです」

んじゃあ、と一番最初に自己紹介を切り出したのは7番目と大御が数えた男だった。

7 「ハンドルネームは＜カシオ＞。よろしく」

2 「ハンドルネームは＜花華＞です。よろしくお願いします」

3 「ハンドルネームは＜を池＞。よろしく」

5 「ハンドルネームは＜愛花＞よ。よろしく」

1 「ハンドルネームは＜しか＞だ。よろしく」

4 「ハンドルネームは＜kaede＞だぜ！ yoroshiku！」

6 「ハンドルネームはー＜寝巻き＞ー。よろしくねー」

8 「・・・＜太郎＞・・・よろしく」

9 「ハンドルネームは＜香織＞だ。よろしく」

そして大御はなんとなくみんなからの視線を感じた。

しぶしぶ自己紹介する。

10 「ハンドルネームは＜植木鉢＞。その・・・よろしく」

「さーて！ 自己紹介し終わったからどん！」

どん！と言った瞬間、それぞれ人影の上にはハンドルネームが浮かんでいた。

「簡単に言うと、ここは実感できるリアル『つぶやいてみた』です。いつでもここにこれるし、ここから出ることもまた簡単です」

＜愛花＞「じゃあ、はやくここから出さないよ」

＜カシオ＞「俺も同意だな。今、とても忙しい時期なんだ」

「まあまあ、焦らないで」

女の子はなだめる。

「今、ここにいる皆さんは『つぶやいてみた』で最もつぶやいた人間上位10人の方々です。」

大御はなるほどと思っていた。

そういう選択法法で選ばれた10人なのか、と。

「では最初に、みなさん『つぶやいてみた』のご利用ありがとうございます」

女の子は満面の笑みを浮かべる。

「皆さん、今後死なないように頑張ってくださいね☆」
その言葉が日常を非日常に変える。その合図となったのだった。

プロローグ「つぶやき機能」(後書き)

初めての作品です。

いろいろとご迷惑をおかけするかもしれませんがよろしくお願いします。

ではまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5138z/>

「つぶやき」アプリケーション

2011年12月17日13時53分発行